



令和2年度

学校だより

5月号

教育目標 **かしこい子 思いやりのある子 たくましい子**

足立区立本木小学校
令和2年5月1日

想像する

校長 藤田 暁美



新緑の季節になりました。しかし、依然として緊急事態が続いていますので、心身ともに解放されることは少ないことでしょう。ただ、こんな状況でも、移り変わる自然を目にすると、心がほぐれます。学校正面の八重桜。少し濃いピンク色の花びらが幾分残っており、私達の目を楽しませてくれます。染井吉野の若葉も5月の風とともに清涼感を与えてくれます。

さて、毎日のように流れてくる新型コロナウイルスのニュース。大きな方向性は国や都などが決めていくこととなりますが、当たり前の日常を取り戻すためには、自戒の意味も込めて、私達一人一人の意識・行動決定も重要だと感じます。今回、いろいろな方々とお話をする中で一番に思うことは、人によって感じ方に温度差があるということです。おかれている立場や状況の違いもありますが、身近な人達が健康でいる間は、どこか、「まだ大丈夫」という安心感があるのかもしれない。

人類稀にみる感染症と言われる新型コロナウイルスですが、今から100年前にも多くの人々の命を奪った感染病があります。スペイン風邪です。世界全体で4500万人以上、日本でも38万人以上の方々が亡くなったと言われています。当時の日本でも、今と同じようにマスク・うがいの励行や人込みを避けるなどが繰り返し呼びかけられていました。しかし、最初の頃はお店などの閉鎖はほとんど行われず、規制はゆるやかであったようです。それを表す記事が神戸新聞に載せられていました。神戸市内で第1次世界大戦の終結記念式典が開かれ、神社の縁日もいつも通りにぎわう様子であったというものです。しかし、その一方で、「累々遺骸の山、累々棺桶野ざらし」という記事の掲載もあります。スペイン風邪であまりに多くの人々が亡くなったため、神戸市内2カ所の火葬場がパンク状態になったというのです。

なぜ、このようなことが起こったのでしょうか。当時の人々も、それぞれの立場で、感染拡大防止に協力していたに違いありません。しかし、一人一人の感じ方は違います。「危機管理においては、常に最悪を想定せよ。」と言われるそうですが、一人一人が思い描く景色は違います。その違いが多くの人々の命を失うことに繋がったとも言えます。

命より大切なものはありません。自分の命、大切な人の命を守るためにも、「自分には今何の症状も出ていないが、既に感染しているのかもしれない。もしかしたら周りの人を感染させてしまうかもしれない。」「もしかしたら、自分が〇〇することで、〇〇となる可能性が高まるかもしれない。」など、想像を働かせることが大切です。そして、医療の最前線で起きていることを「対岸の火事」と見ている自分がないか、自問し続けていくことも。想像することで、自分や周りの人達を少しでも危険から遠ざけることができます。そう考えると、「想像する」とは、相手を「想うこと」から生まれるが故に「想」という字が使われているのかもしれない。「想い」は行動に表れます。

手洗い・うがいにも真剣さが増すことでしょう。不要不急についても、より深く考えていくことでしょう。

この未曾有の難局に対して、私達一人一人が、もしかしたらという「想像」を働かせ、自分ができることを考え、行動していきましょう。

そして、学校・家庭・地域が一体となって、恐れず、あなどらず、辛抱強く、前へ進んでいきましょう。

